

全国学生調査及び教学マネジメントについて



文部科学省

令和8年度大学入学者選抜・教務関係事項連絡協議会

文部科学省 高等教育局 大学振興課

全国学生調査について

全国学生調査について

概要

- 国として、学習者本位の教育への転換を目指す取組の一環として、**全国共通の質問項目**により、**学生目線から**大学教育や学びの実態を把握するための調査を実施。
- 大学・短期大学の学生を対象に、**大学での学習内容や経験**、**大学教育を通じて身に付いた知識・能力**、**大学での学びに関する意識**等について調査。調査結果は**各大学の教育改善**、**社会の大学教育に対する理解促進**、**国の政策立案の基礎資料**として活用。
- 令和元、3、4、6年度と4回の試行実施を行い、**調査方法・質問項目等の調査設計を固め、令和7年度から本格実施**。

背景

- **学生がどのような能力を身に付けているかについて、社会に対する説明や情報公表が不十分**との指摘。
- 各大学が教育成果等の教育の質に関する情報を把握・公表していくこと、社会が理解しやすいよう、**国は全国的な学生調査等を通じて整理し、比較できるように一覧化して公表すべき**との提言。（平成30年11月中央教育審議会「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」）

目的

- **各大学**が、フィードバックされた調査結果をIRやFD・SD活動、自己点検・評価等に活用し、自大学の教育改善を促進する。
- **大学進学希望者やその保護者、地域社会や産業界、海外の留学関係者**等が、学生の学修成果や大学全体の教育成果に対する理解を深める。
- **国**が、今後の政策立案に際しての基礎資料として活用する。
- **学生一人一人**が、振り返りにより今後の学修や大学生活をより充実させ、卒業後の社会における自らの姿を考える契機とする。

令和8年度概要

【調査対象】

- ・ 参加意向のあった大学（短期大学を含む）に在籍する学部（短期大学は学科）の2年生及び最終学年生（短期大学は最終学年生のみ）
（※大学院大学、通信制大学は対象外とする。）

【調査方法】以下のいずれか

- ①文部科学省が実施するインターネット（WEB）調査
- ②参加大学が実施する学生調査（大学独自の学生調査の中に本調査の質問項目を設定）

【調査時期】

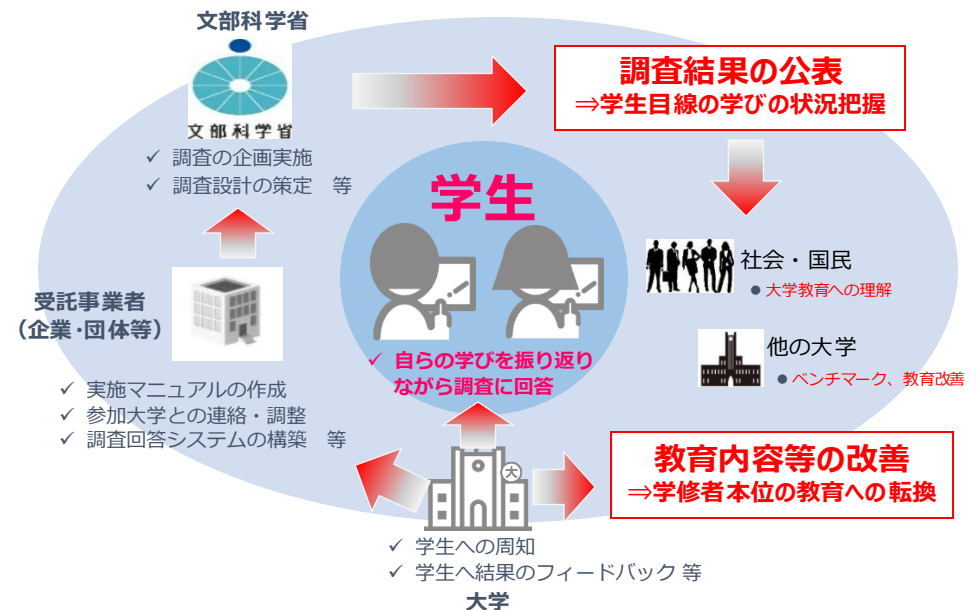
- ・ 令和8年10月頃～令和9年3月末
（このうち、各大学において1か月程度の期間設定を推奨）

【調査項目】

- ・ 大学での学習内容や経験
- ・ 大学教育を通じて身に付いた知識・能力
- ・ 大学での学びに関する意識
- ・ 一週間の生活時間 等 （選択式33問・記述式1問）

【調査結果】

- ・ 全体の調査集計・分析結果や各質問項目の上位校（ポジティブリスト）等を公表
- ・ 参加大学には自大学の調査結果を教学IRとしてフィードバック



令和8年度「全国学生調査（本格実施）」質問項目

1. あなたが在籍する学部（学科）を選択してください。
2. 学部（学科）の分野を選択してください。（自動表示）
3. あなたの学年を選択してください。

問1 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか。
（選択肢：4:よくあった、3:ある程度あった、2:あまりなかった、1:なかった）

4. 理解がしやすいように教え方が工夫されていた。
5. 予習・復習など授業時間外に行うべき学習が指示される。
6. 課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される。
7. グループワークやディスカッションの機会がある。
8. 質疑応答など、教員等との意見交換の機会がある。
9. ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある。

問2 大学在学中に経験した以下の項目はどの程度有用だったと感じますか。
経験していない場合は0を選択してください。

（選択肢：4:有用だった、3:ある程度有用だった、2:あまり有用ではなかった、1:有用ではなかった、0:経験していない）

10. インターンシップ（5日間以上）
11. 海外留学・海外研修（短期も含む）
12. 主に英語で行われる授業の履修（語学科目を除く）

問3 大学教育を通じて、次のような知識や能力などが身に付いたと思いますか。
（選択肢：4:身に付いた、3:ある程度身に付いた、2:あまり身に付いていない、1:身に付いていない）

13. 専門分野に関する知識・理解
14. 将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観
15. 文献・資料を収集・分析する力
16. 論理的に文章を書く力
17. 人に分かりやすく話す力
18. 外国語を使う力

19. 数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能
20. 問題を見つけて解決方法を考える力
21. 他者と協働する力
22. 幅広い知識、ものの見方
23. 異なる文化に関する知識・理解

問4 これまでの大学での学び全体を振り返って、次の項目についてどのように思いますか。

（選択肢：4:そう思う、3:ある程度そう思う、2:あまりそうは思わない、1:そうは思わない）

24. 卒業時まで身に付けるべき知識や能力を意識して学修している。
25. 授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている。
26. 教職員が熱心に教育に取り組んでいる。
27. 大学の学びによって成長を実感している。

問5 今年度後期の授業期間中の平均的な1週間（7日間）の生活時間は、それぞれどのくらいですか。

（選択肢：1:0時間、2:1-5時間、3:6-10時間、4:11-15時間、5:16-20時間、6:21-30時間、7:31時間以上）

28. 授業への出席（実験・実習、オンライン授業を含む）
29. 卒業論文・卒業研究・卒業制作（Q3で2年生を選択すると非表示）
30. 予習・復習・課題など授業に関する学習（卒業論文等は除く）
31. 授業と直接関係しない自主的な学習
（学問に関係する読書やディスカッション、実技の練習、資格試験の勉強等）
32. 部活動／サークル活動
33. アルバイト／定職

34. 本調査や、大学での学びについて意見がありましたら教えてください。
（自由記述）【調査方法①のみ】

情報公表の推進

学生目線から大学教育や学びの実態を把握するために国が試行実施している「全国学生調査」について、学生の学修成果に関する情報を**他の大学・学部間でベンチマーク**できるという利点を十分に生かす形で、その**調査結果を教育の質の向上に向けて積極的に活用することも重要**である。

<具体的方策>

全国学生調査の活用

- ・ **全国学生調査の全校参加に向け**、参加等に関する**インセンティブの設定**を行うとともに、円滑な調査の実施に向けて体制の整備を行う。
- ・ 各高等教育機関における IR 等を通じた**自己点検評価と認証評価での全国学生調査の結果の活用を促進**するために周知等を行う。

中央教育審議会大学分科会 質向上・質保証システム部会

「教育・学習の質向上に向けた新たな評価の在り方ワーキンググループここまでの議論の整理」から抜粋（令和7年8月）

第2部 新たな評価制度の基本的枠組み

3. 評価の視点【何を評価するか】

(1) 評価の基準・項目～内部質保証システム及び学修成果と改善、項目及び指標の共通化

評価に当たっては、在学中、学生一人一人が知識・能力をどの程度身につけたかという学修成果の可視化が重要になる。これまでアンケート等、学生の自己報告を通じてエビデンスを得る間接評価が中心であったが、学修成果の評価は、第一義的には学生の知識や能力の表出に伴う直接評価によって行われることを受け、直接評価と間接評価の双方の観点で学習成果の可視化を行うことが求められる。直接評価に関しては、標準試験、ポートフォリオ、ルーブリックを用いた卒業論文等の評価、授業成績に基づくディプロマ・ポリシーの達成度の評価、プロジェクト・ベースト・ラーニングなどプロジェクト学修の成果の把握などの取組が高等教育機関でも始まっているところであり、そのような取組が学修成果を十分可視化できているかを検証しながら、どのような評価手法が効果的であるか各高等教育機関で検討していくことが必要である。なお、**間接評価に関しては、本格実施する全国学生調査の枠組みを通じて、「新たな評価」の趣旨に即した質問項目を設定し、把握した内容を活用**していくべきである

中央教育審議会大学分科会 質向上・質保証システム部会

「教育・学習の質向上に向けた新たな評価の在り方ワーキンググループ 議論のまとめ」から抜粋（令和8年6月）

第2部 「新たな評価」制度の基本的枠組み

2. 評価の視点【何を評価するか】

(1) 評価の基準・項目～機関全体及び学部等の質保証と質向上の視点からの評価と基準・項目等の共通化

イ. 質向上の視点

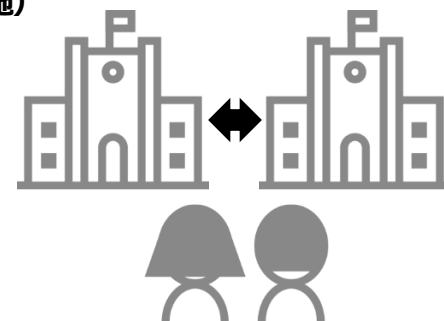
評価に当たっては、在学中、学生一人一人が知識・能力をどの程度身につけたかという学修成果を可視化する取組が重要になる。学修成果の可視化は、これまでアンケート等、学生の自己評価を通じてエビデンスを得る間接評価が中心であったが、第一義的には学生の知識や能力の表出に伴う直接評価によって行われることを受け、直接評価と間接評価の双方の観点で行うことが重要である。（略）

なお、**間接評価に関しては、「全国学生調査」において、「新たな評価」の趣旨に即した質問項目を今後設定し、その結果を評価に活用していくべき**である。

全国学生調査の結果の活用策例

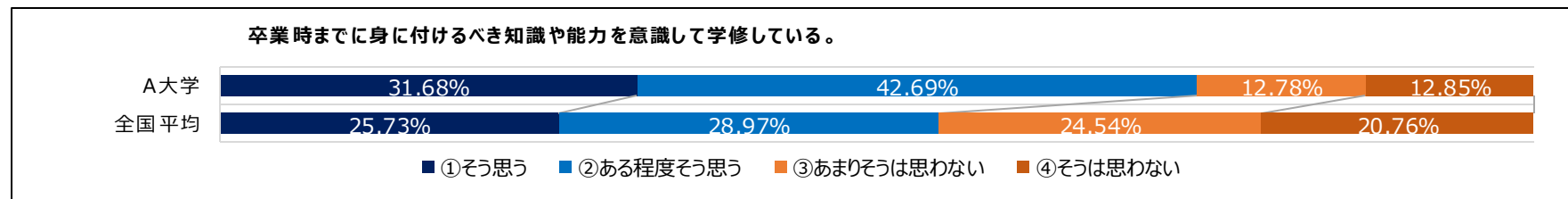
◆ 結果公表の同意が得られた大学の調査結果の公表（令和7年度調査結果の公表から実施）

- 全国共通の質問項目により、学生目線から大学教育や学びの実態を他大学と比較することで、
- 各大学が自大学の学生の実態や意識、他大学との比較分析を踏まえた教育改善に活用
 - 大学進学希望者やその保護者あるいは地域社会、産業界、海外の留学関係者等における、大学に対する理解の促進

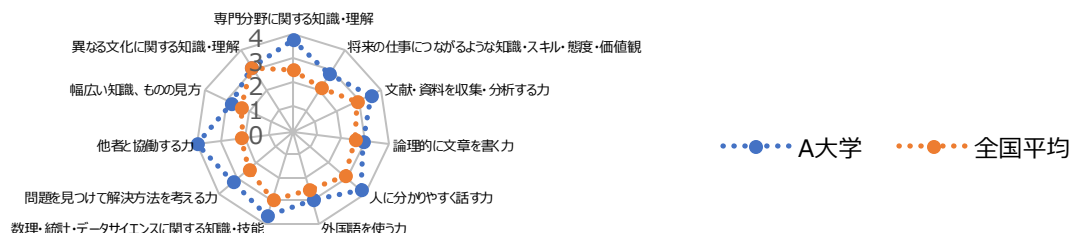


◆ 教学IRレポートの提供

調査結果をまとめた教学IRレポートなど、大学が利用しやすい資料を提供



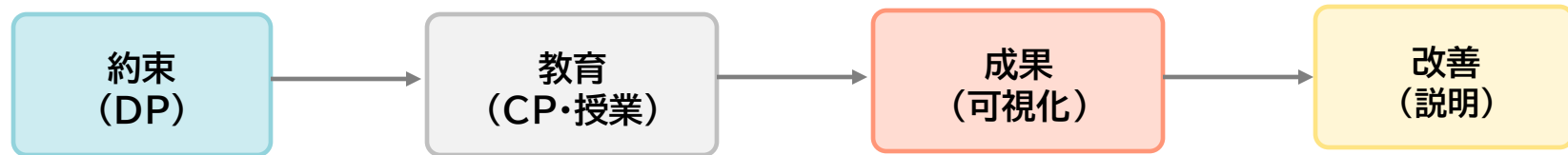
大学教育を通じて、次のような知識や能力などが身に付いたと思いますか。



教学マネジメントについて

教学マネジメントは、 大学の約束(DP)を学生の成長に変える仕組み。

DP・教育課程・学修成果・改善・情報公表を、ひとつの循環として動かす。



政策の流れを一本線で見ると



「新たな評価」のねらい ～学部教育の質を可視化し、学生の成長につなげる～

◎ 18歳人口の急減を見据えた改革

◎ 出発点は、大学教育の価値が社会から見えにくいこと

現在検討が進められている新評価制度(2030年頃導入)。知名度やいわゆる偏差値への依存から脱却し、「個々の学部の教育力」を社会(高校生・保護者等)へ適切に可視化することが最大のねらい。

3つのポイント

1 「入学時の学力」から「入学後の学生の成長」へ

優秀な学生を集めているかではなく、大学が学生をどれだけ成長させたか(付加価値)を重視。

2 評価の主軸は「DP(ディプロマ・ポリシー)の達成度」

学生の成長を測る絶対的な基準として、各学部が掲げたDPがどれだけ達成されているかが問われる。

3 「DPの多様性」を前提とした評価

画一的な基準を押し付けるのではなく、地域貢献や研究重視など、各大学の特色を反映した多様なDPを尊重。だからこそ、DPの具体性が求められる。

「新たな評価」の骨格：「二階建て構造」と「4段階評価」

◆ 現行制度が果たしてきた役割

法令遵守や内部質保証の仕組みを確認し、大学の質保証を支えてきた。
一方で、教育の成果や学生の成長、学部ごとの特色は十分に伝わりにくかった。

これまで：大学として基準を満たす

- ・制度、組織、手続
- ・内部質保証の体制
- ・最低水準の確認



これから：学部教育の成果を示す

- ・DPに掲げた人材育成
- ・学生の成長と教育成果
- ・大学・学部の強み

新評価の骨格

● 二階建て構造

2階部分：学部の「質向上」

評価単位：学部単位

教育内容や学生の成長(成果)について、
学部ごとに【4段階で評価・公表】する。

1階部分：全体の「質保証」

評価単位：大学全体、学部単位

大学設置基準等の法令で求められる
最低限の質保証を確認する(現行の認証
評価機能を継承)。

● 4段階評価

本研修でフォーカス

2つ星(★★)

優れた取組により、
高い教育成果が期待
される

3つ星(★★★)

優れた取組により、
高い教育成果を挙げ
ている

要是正

法令等で求められて
いる水準に達してい
ない

1つ星(★)

高等教育機関として
求められる水準に達
している

※「★」が「★★」「★★★」の前提

高い評価を得るための望ましい教学マネジメントの姿

✓ 鍵は、DPを起点に、学生の「伸び」を説明できるか

入学時

在学中

卒業時

出発点を把握

入学時の能力・経験・背景を
多面的に捉える

成長を支える

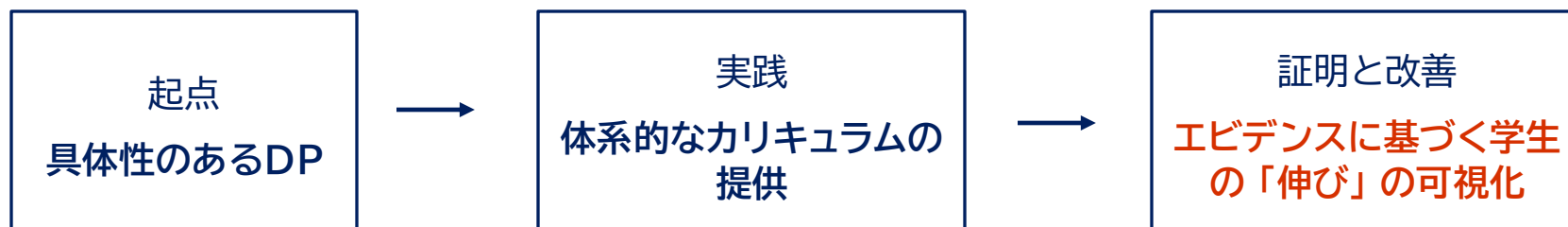
DPと科目を結び、形成的評価と学
修支援で学びを促す

成果を確かめる

直接・間接評価を組み合わせ、DP
到達度と成長を示す

✓ 高評価を獲得する教学マネジメントとは

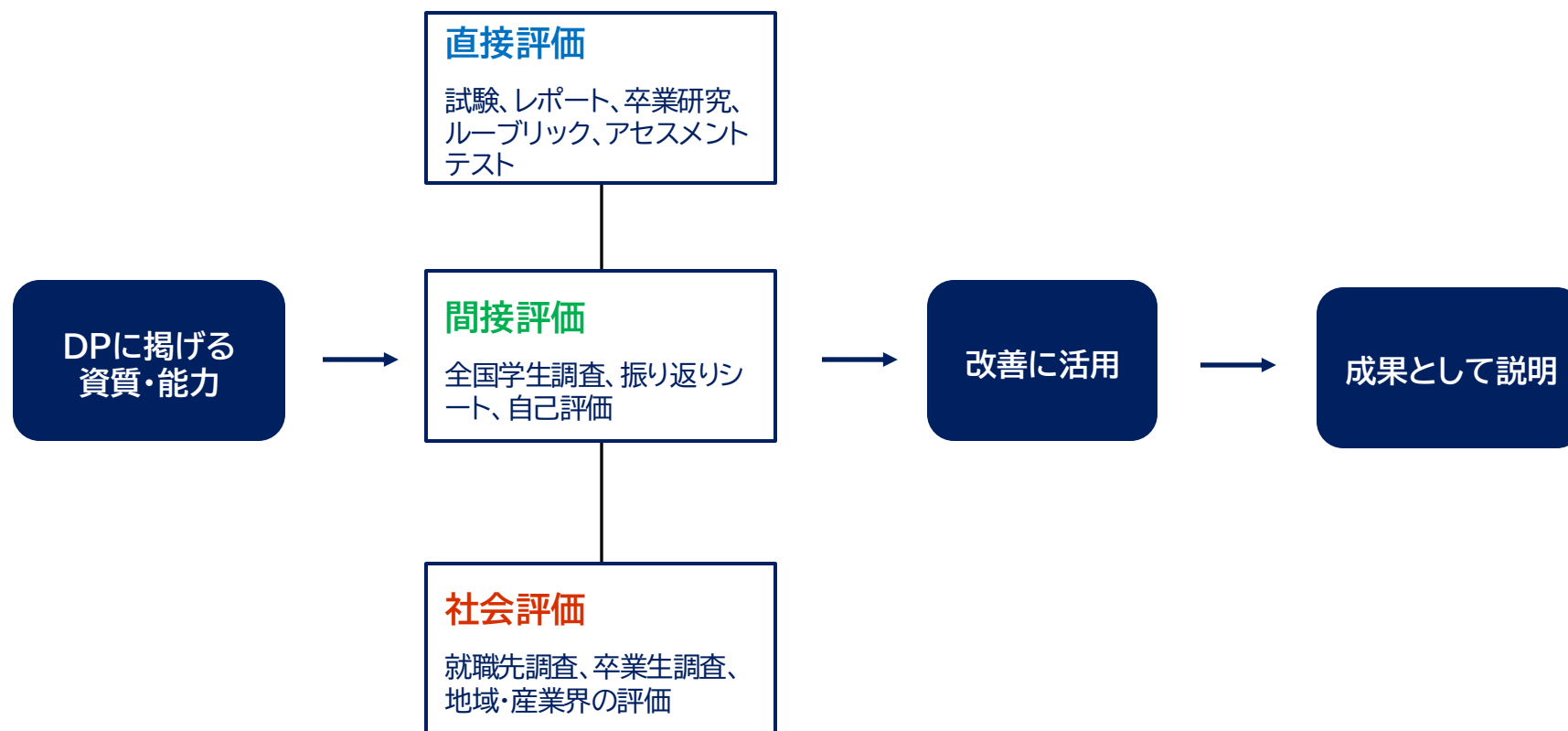
新たな評価では、「各学部がDPで約束した人材像に対して、適切なカリキュラム(CP)を提供し、
学生が成長したことをエビデンス(データ)をもって証明・改善する体制」が不可欠。



高い評価を得るための望ましい教学マネジメントの姿

教育成果を説明するための根拠の設計

一つの数字で説明しようとせず、複数の根拠を組み合わせてストーリーに



DP（ディプロマ・ポリシー）の重要性

➤ DPは、内部質保証のPDCAの起点として、学生が身に付けるべき資質・能力を明確化するもの

- **起点であり終点：** APやCPは、DPを起点として策定される。教育活動が目指す「ゴール」であり、学生にとっては「目指すべき姿」となる
- **学生主語での記述：** 「～を教える」ではなく、「(学生が)～を身に付けている」「～できる」という表現で具体的に記載する必要がある
- **評価可能な基準：** 単なる理念ではなく、学生がその能力を身に付けたかどうかを客観的に「評価・測定」できるレベルで明記されていることが求められる
- **社会への約束：** その学位プログラムを修了した学生が、社会でどのような力を発揮できるのかを社会（高校生、保護者、企業等）に対して約束するもの

「3つのポリシーの策定及び運用に関するガイドライン」が求めるDPのポイント

何ができるようになるか

卒業認定・学位授与に必要な学修成果をできる限り具体的に示す

社会は何を求めているか

進路先・地域・産業界のニーズや分野別参照基準等も踏まえる

どう確かめ改善するか

DP達成度を根拠で把握し、教育課程・授業改善にフィードバックする

全ての起点は「DP」：今後の見直しに向けて

出口からの逆算によるデザイン

「何を教えるか」から出発するのではなく、「卒業時にどのような能力を身に付けてほしいか(DP)」を最初に明確に定義し、そこから逆算してカリキュラム(CP)や入学者選抜(AP)を設計する



従来のDPにありがちな課題

- × 「幅広い教養と豊かな人間性を育成する」など、抽象的で測定不可能な理念になっている
- × 大学が「～を教える」という大学(教員)主語 の記述になっている

✓ DPは、社会への「約束」であり、到達度を客観的に「評価可能」なものへ見直す必要がある

DP見直しの実践例

抽象的な理念から、測定可能な「行動目標」へどう変換するか。

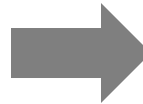
従来のDPにありがちな課題

- × 幅広い教養と情報技術の専門知識を**理解する**。
- × 地域社会に貢献できる人材を**育成する**。

課題：

「理解する」は頭の中の状態で外から測れない。
「育成する」は大学側が主語になっている。

改善



とある大学の例(実際のDP抜粋)

- ✓ システムを開発すること、あるいは…情報学の実践ができること。
- ✓ 地域社会のさまざまなアクターと協働しながら…実践力を身につけている。

ポイント：

学生を主語にし、「開発する」「協働する」など、客観的に観察・評価できる「行動動詞」に変換している。

令和8年度「全国学生調査（本格実施）」質問項目

全国学生調査にも、DPに関する調査項目が含まれていますが、今後見直しも検討中です。

1. あなたが在籍する学部（学科）を選択してください。
2. 学部（学科）の分野を選択してください。（自動表示）
3. あなたの学年を選択してください。

問1 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか。
（選択肢：4:よくあった、3:ある程度あった、2:あまりなかった、1:なかった）

4. 理解がしやすいように教え方が工夫されていた。
5. 予習・復習など授業時間外に行うべき学習が指示される。
6. 課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される。
7. グループワークやディスカッションの機会がある。
8. 質疑応答など、教員等との意見交換の機会がある。
9. ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある。

問2 大学在学中に経験した以下の項目はどの程度有用だったと感じますか。
経験していない場合は0を選択してください。
（選択肢：4:有用だった、3:ある程度有用だった、2:あまり有用ではなかった、1:有用ではなかった、0:経験していない）

10. インターンシップ（5日間以上）
11. 海外留学・海外研修（短期も含む）
12. 主に英語で行われる授業の履修（語学科目を除く）

問3 大学教育を通じて、次のような知識や能力などが身に付いたと思いますか。
（選択肢：4:身に付いた、3:ある程度身に付いた、2:あまり身に付いていない、1:身に付いていない）

13. 専門分野に関する知識・理解
14. 将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観
15. 文献・資料を収集・分析する力
16. 論理的に文章を書く力
17. 人に分かりやすく話す力
18. 外国語を使う力

19. 数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能
20. 問題を見つけて解決方法を考える力
21. 他者と協働する力
22. 幅広い知識、ものの見方
23. 異なる文化に関する知識・理解

問4 これまでの大学での学び全体を振り返って、次の項目について
どのように思いますか。
（選択肢：4:そう思う、3:ある程度そう思う、2:あまりそうは思わない、1:そうは思わない）

24. 卒業時まで身に付けるべき知識や能力を意識して学修している。

25. 授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている。
26. 教職員が熱心に教育に取り組んでいる。
27. 大学の学びによって成長を実感している。

問5 今年度後期の授業期間中の平均的な1週間（7日間）の生活時間は、
それぞれどのくらいですか。
（選択肢：1:0時間、2:1-5時間、3:6-10時間、4:11-15時間、5:16-20時間、6:21-30時間、7:31時間以上）

28. 授業への出席（実験・実習、オンライン授業を含む）
29. 卒業論文・卒業研究・卒業制作（Q3で2年生を選択すると非表示）
30. 予習・復習・課題など授業に関する学習（卒業論文等は除く）
31. 授業と直接関係しない自主的な学習
（学問に関係する読書やディスカッション、実技の練習、資格試験の勉強等）
32. 部活動／サークル活動
33. アルバイト／定職

34. 本調査や、大学での学びについて意見がありましたら教えてください。
（自由記述）【調査方法①のみ】